二人暮らし

フィロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人暮らし

【Ｎコード】
Ｎ９０４９Ｃ

【作者名】
フィロ

【あらすじ】
主人公が毎年の行事である親族会議に参加した時に監禁された少女を見つけた・・・・。そして少女は言った「助けて」と・・・・。

プロローグ

「ご飯できたよー」
俺がそう叫ぶと「はい・・」と少し小さな返事が返ってくる。
「おはよう・・・」
それから一分もせず少女が現れた。
「じゃあ食べよっか」
焼きたてのパンとバターに牛乳と卵焼きというごく一般的な朝食を俺達はとる。だが、昔はこんな朝食じゃなかった。まず俺達ではなく俺だけだったし、朝食もこんなちゃんとしたものではなくコンビニで買ってきた菓子パンだけの粗末なものだった。
朝食が一人から二人に増えたのはつい最近だ。この前の親族会議に出たときに俺はこの少女に出会い、訳あって俺が引き取り育てることになった。
そう、訳あって・・・・・・・。

プロローグ（後書き）

頑張って書いていくので、応援お願いします^^

第一話「地下室にて」

俺には親も兄弟もいないが、親戚というのがいる。なんでも父方の家系は親族会議というのをやるのがあたり前ならしく、親が死んじまった俺も年に一度あるこの面倒くさい行事に参加しなければならない。

今年も例年通りにそれが執り行われた為、俺は馬鹿みたいに長い道のりを列車に揺られながらやって来なくちゃならなかった。

本家に着くと外にいた使用人が「どちら様でしょうか？」と訊ねてきたので名前を名乗り、やっと目的の場所にたどり着いた。

「失礼します」

俺が広間に入ると結構な人数が集まっていいて俺が遅れたような気になった。だが、開始までは後十分はあったので大丈夫だろう。

「遅い」

「あ、スイマセン。でも予定の時間には十分ぐらいありますよ」

「遅い」

何を言っても無駄っぽかったので、おれは謝ったあと一つだけ空いていた座布団に座った。

「では、はじめようか」

大広間の一番奥に座ってる男が言った。

彼は俺の親父の兄である。兄弟としては次男にあたり長兄が俺の一族の現当主であるはずだが、今日は姿が見えない。

だが今の俺にはそんな事はどうでもよく、これから始まるダラダラしたおしゃべりをどう抜け出すかを考えていた。

「すいません、お手洗いを貸してもらってもいいですか？」

話が始まって二十分ぐらいたってからこう声をかけた。

「かまわん」

そう言ったあとさっきの使用人を呼び、俺をトイレまで案内するようにと命令した。

「こちらです」
そう言われて俺は部屋の外に出た。
「疲れた～」
あれから二十分しか経ってないがだいぶ疲れた。椅子かなんかがあれば少しは楽なのだろうが、あいにくここにはそんな気の利いた物など無く座布団の上で正座をするしかなかった。
「でも、まだまだ続きますよね？」
独り言のつもりが聞こえてしまったらしく返答されてしまった。
「ですねぇ、前回はかれこれ二時間ぐらいかかりましたからね」
無視するわけにもいかず話すことにする。
「へぇ、そうなんですかぁ。私は今年からここで働かせてもらっているので前回のことは知らないんですよ」
そう言えばそうだ。前回俺がここに来たときはもっとシワクチャな人が働いていたはずだ。
「あれ、そう言えばそうですよね。前ここで働いてた人はやめたんですか？」
別にシワクチャが恋しいわけでもないがとりあえず聞いてみた。
「いえ、やめたわけじゃないらしいんですが、私も一度しか会ったことがありませんね」
まぁ、別にどうでもいいことだがそんな話でもしてないと会話が持たない。
「あ、そこがお手洗いになっています」
なんとか変な間も無くトイレに着くことができた。
「ありがとうございました」
とりあえずここまで案内してくれた事の礼を述べてトイレに入ろうとしたとき何かが聞こえた。
「あれ、今の何の音ですか？」
気になったので尋ねてみたが、聞こえなかったようで「何が？」と言う顔をしている。
「いや、なんか今なんか叩いたみたいな音が聞こえたんで・・・」

そう言った時もう一度音が聞こえた。パン！と何かを叩くような音だ。
「あ・・・」
今度は使用人さんにも聞こえたらしい。
「何の音かわかりますか？」
そう聞いた後また音が響いた。
「わかりませんがたぶん地下室の方だと思います」
使用人さんによるとさっき話していたシワクチャがたまに地下室に行くらしく今日もたぶんそこにいるらしい。
「もしよかったら、ちょっと見に行かせてもらえませんか？」
音が止まないのが気になったのと、さっきからいやな予感がするので聞いてみた。
「ええ、かまいませんよ。多分鍵はあいてるはずです」
そう言うと使用人さんは「こっちです」と俺を地下に案内してくれた。

地下は思ったより広く何部屋もあったが、音がしているのは一番奥の部屋だ。
「大沢さん、井上ですけど」
使用人さん（井上さんと言うらしい）がドアをノックしたあと中に呼びかけた。
「オイ、井上！お客様ほったらかしてなにやっとんじゃい！さっさと向こうへ行ってお客様をもてなさんかい！」
するといきなりものすごい勢いで起こられた。
「スイマセン。ですが先程からこちらで変な音が聞こえたので気になって様子を見に・・・・・」
「ええから早よお客様のところに帰らんかい！」
井上さんが理由を言ったが一蹴された。仕方ないので俺も井上さんの味方に出る。

「あの、今日ここに呼ばれてきた者なんですが、さっきから変な音がしてて気になってしまって・・・。よければ何の音か教えてもらえませんか？」
するとシワクチャはさっきよりは声を静めていった。
「部外者には関係の無いことです。それよりも早く親族会議に戻ってください・・・」
やっぱり駄目かと思ったその時女の子の声が響いた。
「助けて！」
その声は俺のものでもなく、井上さんのものでもなかった。ましてやシワクチャのものであるはずもなく、それは紛れも無くこの部屋の中にに誰かがいることを物語っていた。
「オイ！今の声は誰のだ！」
ましてやその声は助けを望んでいた。さすがに俺も怒鳴って聞いた。
「あなたには関係の無いことです！お引取りください！！」
「ちょっと大沢さん！いったいどういうことです！」
井上さんもさっきまでとは違い声を張り上げている。
「いいから帰ってください！」
さすがに悠長なことが言ってられる状況じゃなくなったので俺はドアを蹴破ることにした。
「このドアを蹴破る！怪我したくなかったらどいてろ！！」
井上さんを下がらせた後俺はドアを蹴破った！

第一話「地下室にて」（後書き）

更新遅れて申し訳ありません＾＾；
文末に「～た。」が多いのが気になりますが、作者の能力不足ですのでお許しください。（ある程度文章能力がちゃんとしてから修正したいと思います）
次は二～三日のうちに更新できると思うので応援よろしくですw

第二話「帰宅」

蹴破ったその部屋はひどく汚れていた。だが、それよりも俺は目の前の少女から目がはなせなかった。体にはアザがあるし服は汚れところどころ破けている。

「オイ、こらババァ！こりゃいったいどういうことだ！！」

俺はババァの胸倉をつかんで壁に叩きつけながら聞いた。だがババァが何か言うよりも早く入り口から声がした。

「それは私が話す・・・」

声の主は現当主の弟、間金治だった。

「その娘の名前はアズハといってな。亡くなった兄の娘だ。実はつい先日私の兄であり、現当主の間秀一が亡くなった。そのために私の所に養子として迎え入れたが、躾がなっていなかったんでここで教育しなおしていた。それだけだ」

金治はまだ何か言おうとしたがそれは聞けなかった。俺が殴り飛ばしたからだ。

「グッ！何をする貴様ァ！！」

殴られた衝撃で舌を噛んだらしく、金治は口から血をたらしながら怒鳴ってきた。

「黙れ！躾？教育？そんなモンのためにこんな小さい子をこんな場所に監禁してただと！ふざけんな！」

冗談じゃない！そんな理由でこんな小さい子が虐待されたのかと思うと殴らずにはいられなかった。

「ほざくな！そいつに飯と寝床を与えたのはわしだ！貴様にどうこう言われる筋合いはないわ！」

金治が発したその言葉で決心がついた。

「飯？寝床？それだけなら俺の両親が残したものでまかなえる。てめぇがこんな育て方するんなら俺が引き取ってやる。それで文句ないだろ！」

俺はそういうと少女を抱え上げ部屋を出て行った。後ろで何か叫んでいるが別に気にもならない。

あの後俺たちは井上さんが呼んでくれたタクシーに乗り込み屋敷を後にした。

親族の間では誰が時期当主になるだとかもめていたらしいが気にもならなかっし、金治も「勝手にしろ！二度と顔を見せるな！！」と俺に叫んできただけだった。

「・・・・ありがとう」

「え？」

一瞬聞き取れなかったが、その後スグに理解した。

「イヤ、別にいいよ。それより勝手にいろいろ決めちゃってゴメンな」

俺がそう言うと少女は少し顔をこちらに向けて「・・・・うれしかった」と言ってくれた。

ほかには特に喋る事も無く、来た時と同じくらいの時間をかけて俺の家に着いた。出るときとは違って二人で・・・・。

第二話「帰宅」（後書き）

次回はわりと明るい話になると思うんでできれば応援よろしくですw
アドバイスなどは随時受け付け中です（あと誤字指摘も＾＾；

第三話「お買い物」

あれから数日がたった。今俺たちは近くのショッピングセンターに来ている。
親族会議が行われたのがGWだったおかげで特に困ることなく生活できたが、もうすぐ学校が始まるのでそろそろその辺りの用意をする必要が出てきたのだ。もう少し早く来たかったが、来て二日は口を利くのもままならないぐらい酷い状態だった。よっぽどひどい扱いを受けていたんだろうと思う。だが、三日、四日とたっていくうちに心を開いてくれて六日目の今日は笑える程度には回復していた。今は洋服コーナーの辺りでキョロキョロしている。
「何かいいのあった？」
俺がそう言うとアズハは一瞬ビクっとした後、「コレが欲しいです・・・」とワイシャツを持ってきた。
「ワイシャツ？」
あれ？ワイシャツって普通小学生の女の子が欲しがるものなのか？
「え、こんなのでいいのか？」
「えっと・・・、借りてたワイシャツが着やすかったから。あと、お兄ちゃんの部屋にあった本で見て可愛かったし・・・・」
本？・・・・ってありゃ小学生の読んでいい本じゃねぇ！！
「え、ちょ、どこまで読んだの？」
そういうとアズハは顔を赤らめて「変なとこは見てない」と言った。・・・・変なとこって言ってる時点で見ちゃったんだろう。俺はとりあえず「そっか・・・」と引きつった顔で答えるしかなかった。
「まぁワイシャツなら俺の使ってないのあげるから、他に何か好きなやつ選ぶといいよ」
気まずい雰囲気の中アズハは洋服を探しに行った。念のために言っておくが彼女が読んだと思われるのはエロ本ではない。年に二回あるおっきな祭典で買った「Yシャツ少女」という同人誌で、彼女が

言っていた変なのとはボタンを全部はずした胸全開の部分のことだろう。
しばらくしてアズハが戻ってきて「コレが欲しい」とブラウスとスカートを持ってきた。ワイシャツとほとんど変わらないがブラウスの方がいくらか女の子らしい作りになっている。
「よし、じゃあパジャマはどうする？」
「あ、向こうに欲しいのがあったけど高い・・・・・」
「気にスンナ。あと他に服いらねーの？同じやつでもいいから後何着かないと雨の日とか乾かなくて困るぜ」
俺がそう言うとアズハはワンピースを二着持ってきて「コレも高い」と言ったが、俺は気にせずにカゴに入れた。
「気にしなくていいって。じゃあパジャマ見に行く？」
「パジャマならこっちにあった・・・」
そう言って俺の服を引っ張りながらパジャマコーナーまで連れて来てくれた。
「これ・・・・」
そう言ってアズハが取り出したものは確かに高かった。二着セットで一万二千円。さっきの服でも驚いたが、女の子用の服は男物に比べるとだいぶ高い。
「いいよ、他には欲しいのある？」
だが、駄目だといえる訳もなく俺はすんなりＯＫした。俺親父になったら子供甘やかすんだろうな・・・。
「あとパンツ買ってない・・・・・」
そう言って俺の服を引っ張っていこうとするがさすがに断った。
「いや、男の俺が女の子の下着が置いてあるところに入るのは・・・・」
そう言おうとした時アズハの目から涙がこぼれてきた。
「イヤ、嘘うそ。行くって！ほら行こう」
慌てて否定しても泣き止まないので抱っこして下着コーナーに入った。泣いてる女の子を抱っこして女性用の下着コーナーにいる俺は

間違いなく目立っただろう・・・。
「コレ欲しい・・・」
それでも何とか泣き止んでアズハは欲しい物を指差した。パンツは割りと早くに決まって、俺は全部で三万円近くする買い物を済ませた。
「とりあえず買い終わったけど他に何か欲しいのある？」
俺はまだ抱っこしたままのアズハに尋ねた。降ろそうとしたらまた泣き出しそうになったので降ろせていない。
「アイス・・・・」
「あいわかった」
結局その日の出費はまた値上がりしたのだった・・・。

第三話「お買い物」（後書き）

前よりはマシな文になった気がしますが。まだまだです^^；
これからも頑張っていくので応援お願いしますw

第四話「折り紙」

今日でＧＷも最終日となったわけで俺とアズハは最後の休みを満喫・・・するわけでもなく部屋でゴロゴロしていた。まぁ文字通りゴロゴロしているのは俺だけでアズハは折り紙をしている。

「なんかできた？」

アズハがずっと難しそうな顔をしてたので話しかけてみると「これ・・むずかしい・・・・」といってアズハは俺があげた本を持ってきた。

「鶴か、じゃあちょっと貸して・・・」

俺がそう言うとアズハはクシャクシャになった折り紙を俺に渡した。たぶん自分なりに頑張ったのだろう。

「ここがわかんない・・・」

そう言ってアズハが指さしたのは羽の部分だ。なるほど、俺も昔ここに苦戦した思い出がある。

「ここはこの部分を折り曲げるとわかりやすいよ・・・」

とりあえず昔俺が母親に習った方法で教えてみると、アズハは俺の脚に乗って「頑張る・・・」と言いもう一度鶴に挑戦した。最近気づいたのだがアズハには「人の近くにいたい」という思いがあるようだ。だからこの一週間俺とアズハはトイレ以外はほとんど一緒にすごした。まぁ風呂に入る時に「一緒がいい・・・」と言われたときは焦ったが、小学校低学年を一人で風呂に入れるのも危ないかと思いＯＫせざるを得なかった。

つい一週間前まで別々の世界にいた俺達があの場所で偶然出会い、今はこうして一緒に暮らしている。俺はこの一週間が楽しくて仕方なかった。三年前に両親を亡くしずっとこの家に一人だった俺にとって、俺と同じく親を亡くし虐待されているアズハが放って置くことができる存在じゃなかったのだろう。だから俺はアズハを引き取り家で育てると言い張ったんだ。あれから一週間しかたってないに

も関わらず、今俺の脚に座っているアズハはすでに俺のかけがえの無い存在だった。
「・・・できた！」
俺が色々考えてるうちにアズハは鶴を完成させたらしい。その鶴は決して綺麗とは言えなかったが、アズハがとても一生懸命に折ったことは見てわかった。
「お、上手いじゃん！」
俺がそう褒めると、アズハがこっちを向いて小さな声で何か言った。
「・・・え？」
よく聞こえなかったので俺が聞きなおすとアズハは「あげる・・・・」と小さな声で言い俺に鶴を差し出した。
「え、いやせっかく作ったんだから自分で大事にしなよ」
俺がそう言うとアズハは「お兄ちゃんのために作ったやつだから、お兄ちゃんにあげる・・・」と真っ赤になりながら俺に言った。
「その本に「鶴は大切な人に送るものだ」って書いてあったからお兄ちゃんにあげたかったんだけど、ダメ・・・・？」
そう言った後アズハは手を引っ込めようとしたが、俺はその手をつかみ「ダメなわけねぇよ。一生大切にする」と言って鶴を受け取った。それを見たアズハは嬉しそうな顔で「ありがとう・・・」と言い、また真っ赤になりながら部屋から飛び出していった。走る途中で小さくガッツポーズをして・・・。
俺はアズハからもらった鶴を大切に胸ポケットにしまい「今日のお昼ご飯はアズハの大好きなホットケーキにしよう」と考えながら、上機嫌で台所へ向かった・・・・。

第四話「折り紙」（後書き）

こんな未熟な文章に付き合ってくれた方ありがとうございますw
とりあえず話はひと段落（^^;）
次の話からは学校が始まって新キャラ登場させたりアズハに友達作ったりとテンションがあがると思います。まだまだ未熟者ですが話が進むにつれある程度文章能力を上げていきたいと思いますのでどうかお付き合いくださいませ^^;
あと、この間評価くれた人ありがとうございました。なんかやる気が沸いてきました（笑）。更新遅れ気味ですが次回はもうちょっと早めにうpしたいと思います。
よかったら評価や感想いただけると嬉しいです（誤字脱字指摘も^^;）。それではまたw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9049c/

二人暮らし

2010年10月31日04時43分発行